日本慢性疼痛学会
第51～55回大会記念集

The Japanese Society for the Study of Chronic Pain ；
51st~55th memorial magazine



日本慢性疼痛学会

日本慢性疼痛学会
第 51～55 回大会記念集



2022 年 1 月に「大会 50 回記念誌」が発行され、
日本慢性疼痛学会の歩みを振り返る一冊が完成しました。

大会は、第 51 回からも毎年積み重ねられ、
多くの出会いや学び、そして新たな歴史が生まれております。

「いつかまた、この歩みを一冊の記念誌として残せたら」
そんな思いから、
第 51 回大会以降、各大会長の先生方に
「開催を終えて」のコメントと写真をご寄稿いただいてまいりました。

第 55 回大会が終了し、また理事長の交代もあり、
一つの節目を迎えることができました。

このたび、当時の貴重な写真も新たにご提供いただき、
5 年間の歩みを記念集として一冊にまとめることができました。

各大会を懐かしく振り返るとともに、
日本慢性疼痛学会の未来へと思いをつないでいただければ幸いです。



第 7 代 理事長　田邉　豊

第6代 日本慢性疼痛学会
理事長を振り返って



岐阜大学名誉教授
中部国際医療センター
麻酔・疼痛・侵襲制御センター統括センター長

日本慢性疼痛学会
第6代 理事長　飯田　宏樹

私は2022年4月から2025年まで、第6代日本慢性疼痛学会理事長を務めさせていただきました。在任期間を振り返り、多くの皆様のご支援に支えられて学会運営に携わることができたことに、改めて深く感謝しております。

私にとって大きな節目となったのは、2019年2月に岐阜市で開催した第48回日本慢性疼痛学会学術集会です。「慢性痛と生きる、慢性痛に挑む」をテーマに、多職種による慢性疼痛診療の重要性について議論し、550名を超える皆様にご参加いただきました。学会として初めて「痛みと喫煙習慣」をテーマとしたシンポジウムを企画したことも印象深く残っています。

しかし、その翌年から新型コロナウイルス感染症の流行により、学会活動は大きな影響を受けました。第48回大会を最後に、第49回から第51回までの学術集会は延期やオンライン開催など、困難な状況での開催を余儀なくされました。2022年の第51回学術集会では、平川奈緒美大会長から特別講演「慢性疼痛への対応を考える―精神と身体の関係性―」をご依頼いただきましたが、現地開催は叶わず、オンラインで講演しました。その講演に先立つオンライン理事会において、第6代理事長への就任をご依頼いただきました。コロナ禍という困難な時期での就任であり、その責任の重さを感じたことを覚えています。

理事長在任中は、感染対策と学術活動の両立を図りながら、再び対面で活発な議論を行える環境を取り戻すことを目指してまいりました。2023年福岡大会、2024年足利大会、2025年仙台大会と、次第にコロナ禍前の活気が戻り、多職種が会場に集い議論を交わす学会本来の姿を取り戻すことができました。各大会長をはじめ、理事、評議員、事務局、会員の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

日本慢性疼痛学会は、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、理学療法士、公認心理師、鍼灸師など、多様な職種がそれぞれの専門性を持ち寄り、一人の患者を中心に議論できる我が国でも特色ある学会です。慢性疼痛診療は今なお多くの課題を抱えていますが、基礎研究から臨床、教育、多職種連携まで幅広い活動を通じて、本学会が日本の慢性疼痛診療をさらに発展させ、多くの患者さんの希望につながることを心から願っています。

理事長として過ごした日々は、私自身にとっても大変貴重な経験となりました。これまでご支援いただいたすべての会員の皆様に深く感謝申し上げるとともに、今後も一会員として本学会のさらなる発展を応援してまいりたいと思います。



日本慢性疼痛学会
第 51 回大会

大会長　平川 奈緒美

佐賀大学医学部附属病院
ペインクリニック・緩和ケア科



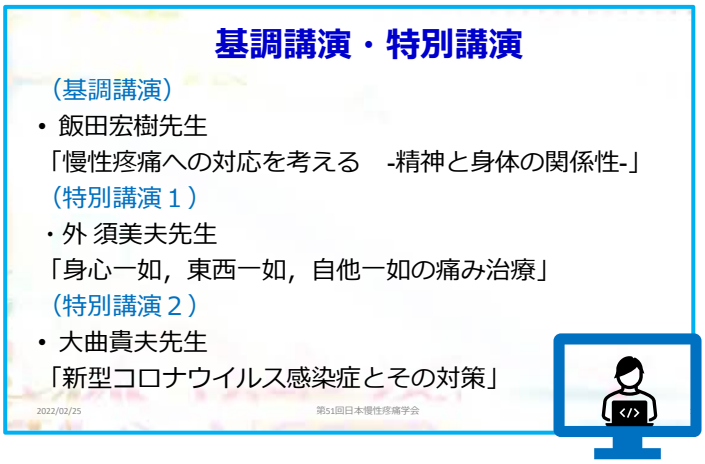
第５１回日本慢性疼痛学会は、当初現地開催（佐賀）を予定しておりましたが
新型コロナウイルスの感染拡大により急遽ＷＥＢ開催に変更となりました

第５１回日本慢性疼痛学会のテーマは、
「慢性痛を理解する　身心一如（しんじん一如）　心と身体の関り」といたしました。
身心一如とは、仏教用語で、肉体と世親は一体のもので分けることはできず一つのものの両面であるという意味です。慢性痛には、身体も心も関係しています。IASP の定義でも痛みは感覚と情動からなります。また、新たに痛覚変調性疼痛という概念が示されました。身体的な痛みが長く続くと心にも影響があり、痛覚変調性疼痛となることもあります。
私たち痛みの治療に関わる医療者は、痛みの慢性化を防ぐために、痛みの評価と診断を正確に行い、適切な治療法の選択をすることが必要ですし、必要があればインターベンションの手技も習得しておかなければなりません。そして他職種連携による治療が必要となります。

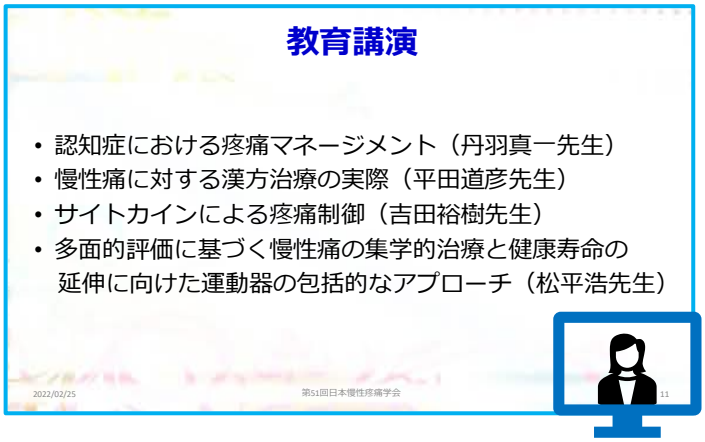


Web 会場1

本学会の基調講演と特別講演１では、本学会のテーマを深く掘り下げたご講演としました。
特別講演２では、まさに本学会も影響をうけた新型コロナウイルス感染症について佐賀大学ご出身の大曲先生にご講演いただきました。



教育講演では、基礎から臨床にわたり幅広い方面でご講演していただきました。
そして、シンポジウムでは、本学会ならではの多職種における慢性痛への向き合い方やオピオイドの適切な使用そして機能的な痛みについてのご講演、ワークショップでは、心理、インターベンション、そして全人的に診療を行う東洋医学などの様々な分野からのご講演をしていただきました。また、心理、看護の各職種別のセッションも本学会でも準備しました。



２日間のライブ配信のみでなくオンデマンド配信も行い、一般演題はオンデマンドで３月７日～3月18日まで配信しました。最終的に368人の参加登録がありました。
開催１か月前に急遽オンライン開催に変更となり、多くの皆様にご迷惑をおかけすることになりました。



Web 会場2



日本慢性疼痛学会
第 52 回大会

大会長　細井昌子

九州大学病院
心療内科・集学的痛みセンター



日本慢性疼痛学会を、２０２３年３月１０日（土）１１日（日）に九州大学医学部百年講堂で、第５２回大会長として企画・開催させていただきました。1992 年 2 月に、第 21 回日本慢性疼痛学会が、当科第 2 代教授の中川哲也先生（現九州大学名誉教授）を学会長として、研究会から学会に昇格した初めての学会として福岡の都久志会館で開催されており、実に３１年ぶりの福岡での開催でした。２０２０年春からのコロナ禍の持続で、WEB 開催が続いておりましたが、２０１９年以来４年ぶりに、現地開催の学会で、２０２３年３月２８日～４月１６日にオンデマンド配信も行いました。実際、２０２３年１月～２月は日本全国クラスターが多発し、現地開催も危ぶまれましたが、感染対策を十分に考慮しつつ、天候にも恵まれ、リアルな交流で 434 名（うちオンデマンドのみ 17 名、医師は 307 人）、参加していただきました。無事に開催できまして、ほっとしております。ご参加の皆様や関連の方々の皆様の温かいご支援の賜物で、コロナ禍あけであったこともあり、参加者からも「印象に残る楽しい慢性疼痛学会」と言っていただくこともあり、皆様のご協力に厚く感謝申し上げます。



会場(九州大学医学部百年講堂合)前で運営スタッフと

九州大学心療内科で運営する 2 回目の慢性疼痛学会になります本学会のテーマは、「慢性疼痛難治例とは何か～集い、語ろう、多職種で～」とさせていただきました。慢性疼痛研究会の頃、九大心療内科先輩の村岡衛医師に私が同行し初めて参加させていただいた頃から感銘を受けてきたのは、「難治化した慢性疼痛をもつ人の苦悩を救いたい」という温かいハートを持つマニアックな治療専門家が一同に会して熱心に討論してきた集まりであることでした。

慢性疼痛治療のプロフェッショナルな集まりであるこの学会で、COVID-19 感染で混乱した 2023 年のわが国における慢性疼痛難治例をどう考えていくか、その上での学会理事からの提言をいただき、九州大学百年講堂の大ホールに一同に会して、リアルにディスカッションするという集まりをメインシンポジウムとして、初日の午前・午後に企画し、個性あふれる理事の面々のハートを伺い知ることができました。

特別講演には、自己培養骨髄間葉系幹細胞（MSC）の静脈内投与で運動感覚機能が得られるという先駆的な活動で再生医療を牽引している札幌医大総長の山下俊彦先生に「神経再生医療と慢性疼痛治療」、線維筋痛症モデルにおけるオキシトシン系の役割を解明しておられる産業医科大学の上田陽一教授には「下垂体後葉ホルモン（バソプレシン・オキシトシン）と慢性疼痛」について、ご講演いただきました。そのほか教育講演３つ、シンポジウム３つ、看護師の会、心理の会、慢性痛の心理アセスメント研究会共催に、ポスター９１演題と、多彩な発表で、多職種の集まりとしての本学会の特色が活かされた内容となりました。ランチョンセミナーでは、「Use of Neurofeedback in the Treatment　of Chronic Pain」について、以前より共同研究を行ってきた米国ワシントン大学の Mark P Jensen 教授にもビデオレクチャーという形でご参加いただき、また「腸内細菌と脳腸相関」について、当科の須藤教授にご講演いただいた他、計５つのセミナーを開催しました。さらに「楽になろう！みんなの痛み」と題して、市民公開講座も開催し、当科から久山研究に参加し慢性疼痛の心身医学的疫学研究を展開している柴田舞欧医師にもその成果を発表してもらいました。



Neurofeedback について（ビデオレクチャー）
シアトルの Jensen 教授と座長の吉野敦雄先生

多職種のスタッフが交流し、日本の慢性疼痛医療を変革していくアイデンティティーを意識化し、大先輩から若手へ「サイエンスとアートの伝承の場」になることを祈り、３月９日の評議員会終了後に会長招宴を開催し博多の美味を味わっていただき、３月１０日夜には着席での参加者懇親会を行い、両懇親会ではくじ引きで決定した着席位置から様々な出会いが生まれ、リアルな交流で盛り上がりました。



今回の運営で、日本慢性疼痛学会事務局長の田邉 豊先生に大変お世話になり感謝するとともに、この記憶をもとに、日本の慢性疼痛医療がさらに発展することを祈念しております。



会長招宴@ひらまつ博多での楽しい語らい



日本慢性疼痛学会
第 53 回大会

大会長　山口　重樹

独協医科大学　麻酔科学講座



第 53 回日本慢性疼痛学会を大会長であった私個人の強い思いで，地元足利市で開催させていただきました。足利市は，日本最古の学校である足利学校がある歴史の古い街です。足利学校は，室町時代から戦国時代にかけて，日本における事実上の最高学府と称され，全国から多くの来学徒があり，足利市において日本の学びの礎が築かれたとされています。そのような背景で，第 53 回日本慢性疼痛学会のテーマは“学びの「原点」足利で慢性疼痛を学ぶ”とさせていただきました。開催形式は，現地開催に加え，新型コロナウイルス感染症の蔓延下に始まったオンデマンド配信を取り入れたハイブリッド開催させていただきました。そのため，多くの方々に現地参加していただきましたが，見逃してしまった一般演題を含む様々な企画をオンデマンド配信で視聴することができたとの好評をいただきました。



大会長の挨拶のようす

学術講演の内容は，会長講演「医療とスティグマ」，追悼講演「宮崎東洋先生を偲ぶ」，特別講演 5 題「医療現場における LGBTQ の現状と課題」，「関節エコーによるリウマチ性疾患の診断と鑑別」，「痛覚変調性疼痛と ADHD：風と共に去りぬの著者マーガレット・ミッチェルの事例から学ぶ―」，「慢性疼痛難治例における苦境・苦悩の視覚化：サークルドローイング法の開発」，「心理専門職の視点から見たオピオイド鎮痛薬の不適切使用」，緊急特別企画ウクライナ支援「Challenges for Ukrainian healthcare system during war」，教育講演 4 題「医原性症候群：慢性疼痛と薬物依存」，「血管穿刺後神経障害と新しい医療安全研修(3DVR・メタバース)」，「感染症 Up-to-Date：コロナ・パンデミックからサイレント・パンデミック AMR まで」，「マインドフルネス」，シンポジウム 8 題「喫煙と慢性疼痛」，「がんサバイバーの痛み」，「精神科医が語る慢性疼痛」，「小児と慢性疼痛」，「痛覚変調性疼痛としての線維筋痛症：最近の知見 up to date」，「心理の会」，「看護師の会」，「口腔顔面痛の会」，


全ての演題を口演で実施した

企業共催セミナー8題「麻酔科医が行うがん疼痛治療：どうするOIC？」,「慢性痛に対する認知行動療法：認知行動モデルによる悪循環のアセスメント」,「慢性疼痛の薬物療法における経皮吸収薬の位置付け：より有用に活用するために」,「アセトアミノフェンと集学的診察：中枢感作を鎮めよう」,「謎めく神経障害性疼痛に挑む：新たな治療を探る」,「帯状疱疹関連痛の病態と治療法：帯状疱疹の予防と帯状疱疹後神経痛への対応から考える」,「脊髄刺激療法のこれからの方向性：中枢神経障害性疼痛におけるFAST™刺激の有用性を中心に」,「脊髄刺激療法における面刺激によるアプローチ：Contour™の臨床経験」,
市民公開講座「子宮頸がんと予防について最新の知見/予防接種の豆知識」と，多種多様な企画を準備いたしました。何れも企画も，本学会の創設の趣旨である「画一的，形式的な運営に流れることなく，会員相互の自由な意見交換の場であり，慢性疼痛の研究を通じて，その病態の解明と診断への貢献について研究成果を社会に還元し，市民の健康増進や福祉に役立たせ，更に会員相互の親睦を図ること」の実現に至ったものと実感すると共に多くの参加者からお褒めの言葉を頂戴致しました。
学術企画以外には,「ワインの夕べ」と題した会員懇親会を開催，障害者施設「こころみ学園」の園生達による葡萄で作られた「ここファームワイナリー」のワインを準備し，美酒に酔いながら参加者が慢性疼痛を熱く語る場とさせていただきました。新型コロナウイルス蔓延の影響で長らくの間，従来のスタイル（お酒を振舞う）の会が開かれていなかったため，多くの方々に会員懇親会にご参加いただきました。



会員懇親会「ワインの夕べ」
次期大会長の伊達久先生の挨拶

以上が，第53回日本慢性疼痛学会の開催報告となりますが，本会を支えていただいた日本慢性疼痛学会の会員の方々，協賛していただきました企業の方々，開催地なりました足利市の市民の方々，そして，本会の運営に尽力してくれた後輩の寺島哲二講師にこの場をかりて感謝し上げます。



サーマルカメラを導入し感染対策を実施
現地開催維持に繋げた
参加者は 400 名超で
盛会に終える


コロナ明けの久しぶりの会長小宴



日本慢性疼痛学会
第 54 回大会

大会長　伊達　久

仙台ペインクリニック　院長



2025 年 2 月 22 日（土）・23 日（日）、仙台にて第 54 回日本慢性疼痛学会を開催した。
当日は日本列島に大寒波の予報が出ており、多くの会員が重装備で来場したが、予報に反して天候は安定しており、交通障害もなかった。
今回のテーマは「みんなで関わろう集学的治療」とし、多診療科や多くの医療関係者に参集いただいた。厚く御礼申し上げる。

シンポジウムでは「多職種によるチーム医療の研修」において、2 つの医療機関でのチーム医療の実践内容や課題が提起され、今後集学的治療をめざす医療機関への有益な示唆となった。

「痛覚変調性疼痛の臨床」では、加藤総夫先生の教育講演に続き、痛覚変調性疼痛をどのように臨床応用するかについてディスカッションが行われた。最近注目されている「運動誘発性鎮痛（EIH）」に関しては、松原貴子先生の教育講演に続き、実際の臨床現場での活動についての報告があった。そのほか、「心理の会」「看護の会」「口腔顔面痛の会」など、例年開催されている職種別のセッションでも活発な議論が展開された。



一般演題は 100 を超える発表があり、熱い議論が交わされました

教育講演では、「痛覚変調性疼痛」「EIH」に加えて、慢性疼痛診療において重要なテーマである北田雅子先生による「動機づけ面接」や、歯科医師・看護師による現場からのメッセージも紹介された。

ワークショップでは、慢性疼痛に対する認知行動療法（CBT）の第一人者である堀越勝先生を迎え、「10分間 CBT」および「慢性疼痛診療におけるコミュニケーションスキル」について実践的なワークショップが行われた。

一般演題は 110 題の応募があり、会場はやや手狭であったが、各セッションは立ち見が出るほどの盛況となった。企業展示は 9 社、書籍販売ブースも併設し、スタンプラリーを実施したことで多くの来場者が立ち寄った。

今回の参加者は総勢 605 名で、内訳は医師 306 名、看護師 44 名、理学・作業療法士 71 名、心理職 30 名、その他薬剤師など多様な職種の医療関係者が来場した。

日本慢性疼痛学会は、多職種の連携を重視する学会であり、今後もこのように多くの専門職が集う場として発展することを期待したい。





特別講演やシンポジウムで
新しい知識を勉強することが出来ました





懇親会では、地酒と美味しい料理で歓談の花が咲きました



日本慢性疼痛学会 第 55 回大会

大会長　渡邉　恵介

奈良県立医科大学附属病院
ペインセンター



2026 年 2 月 27 日（金）・28 日（土）、奈良市のホテル日航奈良において、テーマを「慢性疼痛に寄り添う」として、第 55 回慢性疼痛学会を開催いたしました。
全国各地から 454 名の医療従事者にご参加いただき、そのうち歯科医師、看護師、心理士、理学療法士、鍼灸師など医師以外の職種が 197 名を占め、集学的治療を体現した学会となりました。

冒頭の大会長挨拶では、「慢性疼痛を単に取り去るべき病苦として捉えるのではなく、患者の人生の中で慢性疼痛が生じた意味に寄り添う」というテーマについて説明し、続いてオープニングシンポジウム「患者に寄り添うとは」を開催しました。心療内科医、看護師、理学療法士、心理士の各職種より、それぞれの立場からの患者への寄り添い方についてご講演いただき、職種間の理解を深める機会となりました。
特別講演では、地域医療の現場で「寄り添う医療」を実践されてきた花戸貴司先生より、豊富な経験に基づく示唆に富むご講演を賜りました。


オープニングシンポジウム「患者に寄り添うとは」

教育講演では、仲西康顕先生より超音波診断装置を用いた針刺し後疼痛・ワクチン接種後疼痛への取り組みについて、また松原貴子先生より最新の運動療法に関する知見についてご講演いただきました。
さらに、近年患者の生活習慣の変容を促す有効な技法として注目される「動機づけ面接」について、北田雅子先生にワークショップをご企画いただきました。示唆に富む内容であり、参加者は楽しみながら学ぶことができました。

そのほか、ブロック治療、心理療法、運動療法、看護、口腔顔面痛、統合医療など多彩なシンポジウムが開催され、分野や職種の垣根を越えた活発な議論が行われました。

近年、慢性疼痛の理解において重要な概念である痛覚変調性疼痛について，本学会では頭痛やがん治療関連痛など、これまで十分に議論されてこなかった領域についても検討を深めることができました。

一般演題は 87 題にのぼり、痛覚変調に関する基礎研究から難治性慢性疼痛に対する集学的治療の実践報告まで、幅広い内容が発表されました。

27 日（金）夜の懇親会では奈良の地酒 10 種類をご用意し、参加者に飲み比べをお楽しみいただきました。終始和やかな雰囲気の中で親睦が深まりました。

本学会を通じて、多職種による集学的治療の重要性が一層共有され、難治性慢性疼痛への理解が深まり、参加者の明日からの臨床に資するものとなったと確信しております。

最後に、本学会の開催にあたりご尽力いただいた奈良県立医科大学関係者の皆様、ならびに運営会社の皆様に心より感謝申し上げます。



懇親会



歴代開催一覧

開催年	回		会長	所属	開催都市
1982年 〜 1991年	1 〜 20	研究会	2回/年開催		
1992年	21	学会	中川 哲也	九州大学医学部心療内科	福岡
1993年	22		吉井 信夫	東邦大学大橋病院脳神経外科	東京
1994年	23		兵頭 正義	大阪医科大学麻酔科	大阪
1995年	24		天方 義邦	滋賀医科大学麻酔科学教室	京都
1996年	25		稲葉 繁	日本歯科大歯学部高齢者歯科学	東京
1997年	26		松本 清	昭和大学医学部脳神経外科	東京
1998年	27		永田 勝太郎	浜松医科大学保健管理センター心療内科	京都
1999年	28		宮崎 東洋	順天堂大学医学部麻酔科学講座	東京
2000年	29		柳田 尚	帝京大学医学部附属市原病院麻酔科・ペインセンター	東京
2001年	30		鮫島 寛次	東邦大学医学部附属大橋病院脳神経外科	東京
2002年	31		菅原 道哉	東邦大学医学部精神神経医学講座	東京
2003年	32		中井 吉英	関西医科大学心療内科	京都
2004年	33		花岡 一雄	東京大学大学院医学系研究科 外科学専攻生体管理医学講座麻酔学	東京
2005年	34		山田 仁三	東京医科大学解剖学第二講座	東京
2006年	35		伊藤 樹史	東京医科大学霞ヶ浦病院 麻酔科・集中治療部・ペインクリニック	東京
2007年	36		北出 利勝	明治鍼灸大学 大学院	京都
2008年	37		北島 敏光	獨協医科大学麻酔科学教室	栃木
2009年	38		村川 和重	兵庫医科大学疼痛制御科学教室・ペインクリニック部	兵庫
2010年	39		片山 容一	日本大学医学部脳神経外科	東京
2011年	40		小川 節郎	日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野	東京
2012年	41		青山 幸生	東邦大学医学部麻酔科学第二講座	東京
2013年	42		大瀬戸 清茂	東京医科大学麻酔科	東京
2014年	43		世良田 和幸	昭和大学横浜市北部病院麻酔科	横浜
2015年	44		別部 智司	神奈川歯科大学麻酔科学講座	横浜
2016年	45		佐藤 英俊	佐賀大学医学部附属病院地域包括緩和ケア科	佐賀
2017年	46		細川 豊史	京都府立医科大学 疼痛・緩和医療学教室	京都
2018年	47		森本 昌宏	近畿大学医学部麻酔科学講座	大阪
2019年	48		飯田 宏樹	岐阜大学大学院医学系研究科麻酔・疼痛制御学分野	岐阜
2020年	49	Web開催/現地	田邉 豊	順天堂大学医学部附属練馬病院麻酔科・ペインクリニック	東京
2021年	50	Web開催	今村 佳樹	日本大学歯学部口腔診断学講座	東京
2022年	51	Web開催/ｵﾝﾃﾞﾏﾝﾄﾞ配信	平川 奈緒美	佐賀大学医学部附属病院ペインクリニック・緩和ケア科	佐賀
2023年	52	現地/ｵﾝﾃﾞﾏﾝﾄﾞ配信	細井 昌子	九州大学医学部心療内科	福岡
2024年	53	現地/ｵﾝﾃﾞﾏﾝﾄﾞ配信	山口 重樹	獨協医科大学麻酔科学講座	足利
2025年	54		伊達 久	仙台ペインクリニック	仙台
2026年	55		渡邉 恵介	奈良県立医科大学附属病院 ペインセンター	奈良
2027年	56	開催予定	松原 貴子	神戸学院大学 総合リハビリテーション学部	神戸
2028年	57	開催予定	濱口 眞輔	獨協医科大学医学部麻酔科学講座	栃木

日本慢性疼痛学会

第51～55回大会記念集

2026年7月　第1版発行
2026年9月　第2版発行

発行者　日本慢性疼痛学会
事務局　〒136-0075　東京都江東区新砂 3-3-20
順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター
麻酔科・ペインクリニック内

※許可なしに転載・複製することを禁じます。